

ワケ丸、ツカステタウンで 「ごみは命に関わるのじゃ」と 旧友・いーじゃん侍に熱く語る

ワケ丸は青春時代を過ごしたツカステタウンへ。かつてワケ丸はこの街で買い物ばかりしていた。しかし、初恋の女性が街にあふれたごみから発生したゴミフルエンザに感染し、死んでしまった。そのショックから、ワケ丸はごみのことを真剣に考えるようになり、ツカステタウンから足を洗い、ごみダイエット忍者になったのである。ワケ丸は「ツカステタウンの人々も、ごみが人のからだに及ぼす害を知り、ストップ・ザ・ツカステ運動が始まっておれば良いが。」と思っていたが、昔の仲間、いーじゃん侍は相変わらず、買利物に明け暮れ、大量の買利物袋を持ち歩いていたのであった。

「今日も買利物、いーじゃん、いーじゃん」
「おや、いーじゃんじゃないが!?」
「あ、ワケ丸ー! 超久しぶり。その忍者ルック、カッコいいじゃん。どこで買ったんだ?」
「妻のおリサが作ってくれたのじゃ。いーじゃんはいまだに買利物三昧してるのか?」
「いーじゃん、いらなくなったら捨てればいいじゃん」
「おぬし、まだ、そんな生活を・・・」
「お前だって、そんな生活してたじゃん」



「ワシの恋人は、この街の大量のごみから発生したゴミフルエンザに感染し、命を落としてしまったのじゃ。ごみを安易に捨て続けていて、やがて埋め立て地がいっしょになる。でもな、問題はそれだけじゃない。本当に人間や生き物の生命に影響を及ぼすんだよ」

「ワシはあの時の悲しみを決して忘れないんじや、だから、ごみダイエット忍者になったのじゃ」
「そ、そんなんだ。強者もごみの害を考えて、むやみにモノを買ったり捨てたりしないよう気をつけるよ。」

ごみワケ丸の細道をゆく

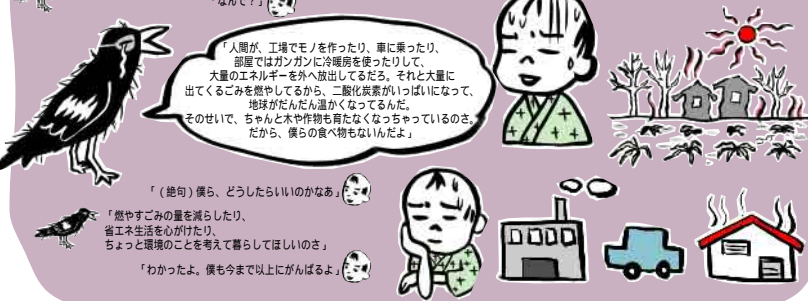
マゴミダイエット忍者マワケ丸一家



コワケ丸、絶句! オゾンソウハカイクンで 友人・タビガラスから地球の現状を聞く。

「オゾン層が破壊されて、有害な紫外線がすごいんだよ。で、その紫外線を浴びると皮膚がんになる確率がとても高くなるんだ。日射量が多いオーストラリアの学校では、サングラスの着用を義務付けてるところもあるんだ。」
「日光浴ができていいわけ?」
「当たり前さ。日光浴なんて自衛行為だよ。」
「それにしては、ガリガリにやせている。ちゃんと食べているの?」
「いや、食べ物がないんだ。」
「なんで?」

コワケ丸は、友人・タビガラスがオゾンソウハカイクンで居ると聞き、立ち寄ってみる。驚いたことにタビガラスは目にはサングラス、手にはしっかりと日焼け止めローション。世界中を旅するタビガラスにとって、この2つは必須アイテムなのだと言う。すでに紫外線で視力はやや低下してしまい、羽もざらついている。しかも、ガリガリにやせている。いったいどうしているのだ!とコワケ丸は、早速、タビガラスに事情を聞いてみるのだった。



「人間が、工場でもノを作ったり、車に乗ったり、部屋ではガンガンに冷暖房を使ったりして、大量のエネルギーを外へ放出してるから、それと大量に出てくるごみを燃やしてるから、二酸化炭素がいっしょになって、地球がだんだん温かくなってるんだ。そのせいで、ちゃんと木や作物も育たなくなっちゃっているさ。だから、僕らの食べ物もないんだよ。」
「(絶句)僕ら、どうしたらいいのかなあ。」
「燃やすごみの量を減らしたり、省エネ生活を心がけたり、ちょっと環境のことを考えてもらってはほしいのさ。」
「わかったよ。僕も今度以上にがんばるよ。」

旅はみちづれ、世はなまげ。
ワケ丸一家と一緒に「ごみ」について考えよう!!

私たちのまわりにはモノがあふれ、使えぬものを繰り返してあげる。しかし、それがそのまま環境問題を引き起こしてしまっている。ごみが増え続ける「ごみ」埋め立て地が満杯になり「困る」というだけでなく、地球の温暖化や、人々や生き物に悪影響を及ぼすこと。この旅で町田のみなさんと、改めて認識してほしいのじゃ。では、ワケ丸、おリサ、コワケ丸、ステナイ蔵とをこめて「ごみワケ丸」のブログを訪ねる旅へレッツゴー!!



ステナイ蔵、地球に優しく暮らす旅の宿「マンク」の女将にホロリ

「人生 ごみなきや、苦労はないさあいやあ、いっしょに。絶妙なお湯かげんじょう。」
「ありがとうございます。夕食は、今朝ほど近所で購入した、地元産の食材を使ったものを用意しております。」
「ありがとうございます。マンクは、身体にほどよい量の食料だからワシのような年輩したモンでも、見せず食べられる。ワシもそれが嬉しいのじゃよ。」
「テレビは相変わらずないので、お暇であれば、私がお話相手させていただきますので。」
「嬉しいのう。月明の下で、女将とふたり、たいもない話をするのが、ワシにとって、ここでの一番の楽しみじゃ。」
「まあ、嬉しいことです。」
「ところで、最近は何がまた新しい、暮らしの術を見出されたか?」
「以前、訪ねたときは、街への見出しを車ではなく、自転車で行くようになったこと、生ごみは畑の肥料にしていること、野菜は使い切っていると聞いたのじゃが。」
「そうですね。最近始めたのは、同じモノを何度も使う使い回しの術がしら。コタツがぶんのカバーなどは、あまってる布でパッチワークにして自分で縫ったりし始めてます。これが楽しくして。」
「まさに、スローライフ(注)。しかも訪ねるたびに、女将は、地球に優しいことを実践している。ますます好きになってしまいましたなあ。」
「え、何?」
「いやいや、女将には教えられるということよ。ハハハ」



〔注〕「スローライフ」効率やスピードが優先される現代社会。「より長く、より快適に」と、経済的豊かさとゆとりを両立させる生活スタイル。暮らしのペースをゆるやかにする。同時に健康にもよい。1980年代のアメリカで生まれた生活スタイル。2000年代の日本でも注目され、1980年代のアメリカで生まれた「スローフード運動」は、食生活に「スロー」という概念が導入され、日本では2008年ごろより広がり始めた。2009年の「環境白書」でも紹介された。(出典:環境 goo「スローライフ」より)

おリサ号泣! 故郷ワケテマチに メンドウ菌が繁殖し、 街がごみの山に!

おリサは、ワケあって両親に預けている娘・コリサの暮らす故郷・ワケテマチへ。おリサが暮らしていたころは、分別ある人々ばかりで街はとても美しくあった。なのに、今回戻ってみると、街は一変していた。「ごみの分別なんてメンドウ、メンドウ」とメンドウ菌に侵された住民が増えてしまい、分別しないで捨てられたごみで街はあふれかえっていた。あまりの変貌におリサは驚き、号泣。しかし、感傷に浸っている場合ではない。おリサは早速、メンドウ菌の駆除に乗り出すのだった。



「ごみを分別してはいる人々も、メンドウ菌にかかってしまってる。自分たちだけ分別してもしかたないからと、ごみを分けなくなっちゃったんだよ。」
「お前の愛嬌、コリサも「メンドウ、メンドウ」が口癖になってしまっ。何でも同じ袋に入れて捨てちゃうんだよ。明らかにメンドウ菌の初期症状が出始めているんだよねえ。」
「ここ数年で、人口が増えて、ごみを分けて捨てられない人が増えてしまった。そうすると、ごみの収集もされなくなってしまっかねえ。」
「何てこと... このままでは、この街はメンドウ菌にやられてしまう。とにかくまずはこのメンドウ菌を駆除しなければ。」
「みなさん、メンドウだと聞いていると、街そのものが破壊されちゃいます! 今こそ、みんなでメンドウ菌を駆除しましょう!!」

